団体名	安芸太田町	所　属	地域づくり課	他団体等との連携	安芸太田しわいマラソン実行委員会
連絡先	(0826)28-2112				

取組事例名	地域住民等との協働によるマラソンイベントの開催	取組期間	平成２２年９月～

取組の概要　～　地域住民との協働によるウルトラマラソン『安芸太田しわいマラソン』の開催

安芸太田町の地域の活性化を目的として，平成２２年より安芸太田町全域をコースとしたウルトラマラソン『安芸太田しわいマラソン』（主催：安芸太田しわいマラソン実行委員会）を開催している。

大会運営に町内自治振興会，企業，団体，加計高校生等地域住民がボランティアで協力するなど，全町を挙げてのイベントとして定着し始めている。

取組の背景　～　町のＰＲ・地域活性化を目的としたウルトラマラソン大会開催の提案を受ける

広島県安芸太田町は，中国地方ワーストの人口減少率，広島県最少人口そして高齢化率県内１位と，超過疎化かつ高齢化が課題となっている。

そのような状況の中，町有施設指定管理者事務局長の発案により，全国に向けての安芸太田町のＰＲ・地域活性化，合併した旧３町村全体を巻き込んだ取組による早期一体感の醸成等をねらいとして，次の点に着目し『安芸太田しわいマラソン』を開催することとした。

（１）旧町村をコースとすることで，全町を挙げてのイベントとなり，旧町村の交流が可能であること
（２）距離が長く，高低差を利用した過酷なコースであれば，全国各地で行われているウルトラマラソンに代表されるように，コアな競技者の参加が見込まれること
（３）マラソンコースに観光コースを取り入れることで，競技者へ安芸太田町の観光スポットを PR できること
（４）町民がエイドステーション等でイベントに加わることで，競技者が町民のおもてなしの心に触れることができること

取組のねらい　～　町内全域をコースとすることにより，町のＰＲ・活性化・一体感の醸成を図る

（１）町内観光名所も巡る町内全域をコースとすることにより，全国に向けてのＰＲ及び活性化を図る。
（２）全町を挙げてのイベントとし，旧３町村の交流による町内の一体感の醸成を図る。
（３）ランナーが町民の温かさにふれることにより，安芸太田ファンを増やしランナーのリピーター化を図る。

取組の具体的内容　～　町民・行政が一体となり，「おもてなし」の気持ちを第一にマラソン大会を運営

（１）「安芸太田しわいマラソン」の概要

町有施設指定管理者事務局長の『安芸太田町の豊かな自然を生かし，町全域をコースとする全行程８８ｋｍ，高低差８５４ｍという日本有数の過酷なコースとなるウルトラマラソンを開催し，町のＰＲ及び活性化につなげる』という提案により，平成２２年より「安芸太田しわいマラソン」を開催している。（平成２１年１０月には，町内有志による試走会を実施）

（２）運営体制

実行委員会には，体協等の町内の各種団体，町観光協会，太田川森林組合，自治振興会連絡協議会，町消防団，広島市農協，行政（国・町）が参画。大会当日には，コース沿線の自治振興会，企業，加計高校生，県内数大学の学生ボランティア等によるエイドステーション（無料飲食物提供所）運営，安芸太田町消防団による交通整理等多くのボランティアが運営スタッフとして協力するなど，全町あげてのイベントとなっている。（平成２４年度は，エイドステーションの運営が困難な地区に対し，県地域政策局の過疎地域振興課等からボランティア運営スタッフの協力を得た。）

（３）見所・全国的評価

コース上に，「温井ダム」，「深入山」，「恐羅漢山」，「三段峡」，「井仁の棚田」など，数多くのビューポイントを配していることに加え，「おもてなし」の気持ちを第一に選手に応対していることもあり，選手から「沿道から名前を呼んで声援してもらい感動した」などの声が寄せられている。

平成２３年の「第１５回全国ランニング大会１００撰」に中国地方で唯一選出されるという高い評価を受け，平成２４年の大会も連続して同１００撰に選ばれるなど，第１回は約２２０名であった参加者は，本年（第４回大会）は，募集開始から２か月以内で全国から定員（４８１名）を上回る５３０名を超える応募があるなど，ウルトラマラソンを走破するランナー間では，定着したイベントとなっている。

取組を進めていく中での課題・問題点　～　過疎･高齢化が進行する中での運営スタッフの確保

（１）全町を挙げてのイベント

町をあげた大会とするためには，コース沿線の自治振興会だけでなく，沿線外の自治振興会の参加協力が課題であった。

（２）運営スタッフの確保

民間有志が運営主体となっているが，大会運営車両２０台の不足や運転要員などの資材や人員の不足，さらに，地域が担うエイドステーション等では，高齢化による地域住民のボランティア参加者の減少と競技者の増加に伴うエイドステーション等での負担の増加の問題があり，運営スタッフを確保する必要があった。

創意工夫した点　～　大会運営への行政の関与を最小にとどめ，民間の持つ運営力を最大限に生かす

（１）全町を挙げた取組

ア　コース以外の自治振興会の参画

第２回大会から旧三町村の支部長で構成する自治振興会連絡協議会に実行委員会に加わってもらうことで，沿線外の自治振興会が参加しやすい体制を確保した。

イ　県内人口最少を逆手にとった戦略

人口が少ないこと（県内最少：約７，２００人）を逆手にとり，全戸に選手名簿を配付し，町民全体が，イベントに関心を持ち，さらに，町民が選手を名前で応援できるようにすることで，「おもてなし」が前面にでる大会となるような仕掛けをした。

（２）行政の後方支援と運営スタッフの確保

ア　行政の後方支援

当大会は，民間有志が発案しその運営主体となっていることから，町行政は民間だけでは困難な大会運営部分，例えば選手の安全確保体制を支える先導車，救護車や広報車など２０台を超える大会運営車両とその運転要員等としての職員派遣，運営資金の助成等最小限の関与にとどめ，民間の持つ運営力が最大限活かされるよう工夫している。

イ　町内外の企業，団体，学生等のボランティアの確保

町内外の企業や学生等に，声をかけ，ボランティアを確保している。具体的には，企業のＣＳＲの一貫として，広島銀行，広島市農協や町内のスキー場のインストラクター，広島県庁の職員や，町内の高校がボランティアとして参加した。

取組の成果（効果）～　選手と地域との交流が，地域に元気を与えるとともに選手もリピーター化

「おもてなし」の気持ちを第一に地域を上げて対応していることもあり，選手から「沿道から名前を呼んで声援してもらい感動した」という声が寄せられる一方，いわゆるリピーターと言われる全国から毎年のように大会に参加する選手のガンバル姿は，高齢化や過疎化に悩む地域住民にとっても，「息子や娘がふるさとに帰って来てガンバっているように思える」と言う声があり，選手から逆に勇気をもらった，元気をもらったという声も上がっている。まさに，こうした選手と地域との交流が，地域に元気を与えてくれている。

安芸太田町のファンを増やしランナーのリピーター化を図るという大会の目的は，大いに達成されている。

町内外の個人，団体，地域，企業，行政がまさにタッグを組んで運営しているこの「安芸太田しわいマラソン」は，町が進める「協働のまちづくり」の姿を具現化したものといえ，この大会の運営形態を地域に出向いた際に丁寧に説明すれば，「協働」という意味を理解しやすいという住民の声が増えつつあり，他の事業推進にも相乗効果が表れつつある。

今後の展開　～　地域の負担を考慮し，身の丈に合った大会運営をめざす

来年の第５回大会では，記念大会として１００キロコース（１００名限定）の設定を予定しており，新たにコース沿線となる自治振興会等に対して協力を呼びかけている。

一方，参加選手を５００名以上に増やすことは，エイドステーションを運営する地域に大きな負荷がかかる。地域の負担を今以上にかけないためにも，実行委員会内では「身の丈に合った大会運営」をめざすこととしている。

他団体へのアドバイス　～　地域をまきこんだイベントにするためには，行政は後方支援に徹する

地域を元気にするためには，いかに地域を巻き込んだイベントにするかが大切と思われる。この大会が初めから行政主導で行われていたら成功はなかった。時には，民間の力を信じ切って，後方支援に徹することも大切である。